

科研費ステップアップを後押しする科研費分析を目指して - 基盤研究 (A) 採択者の科研費採択履歴調査とその活用 -

久保 琢也*、伊藤 広幸

信州大学 学術研究・産学官連携推進機構 リサーチアドミニストレーション室

*kubotaku@shinshu-u.ac.jp



背景 科研費ステップアップのための課題

レピュテーションの向上、間接経費増のためにも、研究者には大型科研費へステップアップしてほしい

研究者

- 科研費の上位種目へのステップアップは研究の発展や、研究者としてのキャリア形成等にとって重要なプロセス
- しかし、リスクを伴うことから、軽々に挑戦できない

そもそも…

- 研究者は客観的な情報に基づいて意思決定を行なっているのか
 - 大学やURAは研究者に対して客観的な情報を提供できているのか
- IR担当のURAにできること
大型科研費へステップアップしている (と考えられる) 研究者の特徴を明らかにし、研究者の意思決定を支援するための客観的なデータを提供する



調査概要 科研費採択履歴調査

目的：基盤研究 (A)へステップアップしている (と考えられる) 研究者の科研費採択履歴 (件数、種目、総額等) の特徴を明らかにする

- 方法：
1. KAKENデータベース (<https://kaken.nii.ac.jp>) より、2018年度、2019年度の基盤A採択者 (研究者番号) を取得 (1207名) (注1)
 2. 1の研究者について、過去10年間の科研費採択履歴を抽出 (注2)
 3. さらに、大型科研費に採択されていない研究者を抽出し、研究種目別の採択件数や、総配分額 (直接経費) の合計等、探索的にその特徴を明らかにする (注3)

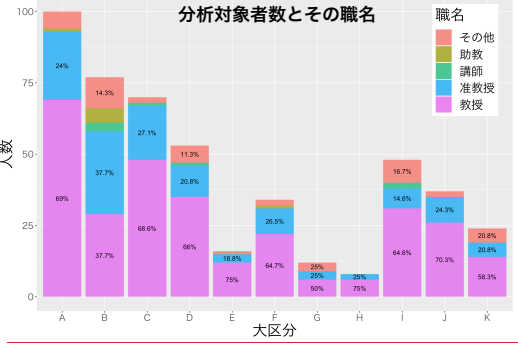
過去10年間の科研費採択履歴 (注4)	人数
大型科研費の採択経験あり	696
大型科研費の採択経験なし	471
採択履歴なし	40

分析対象

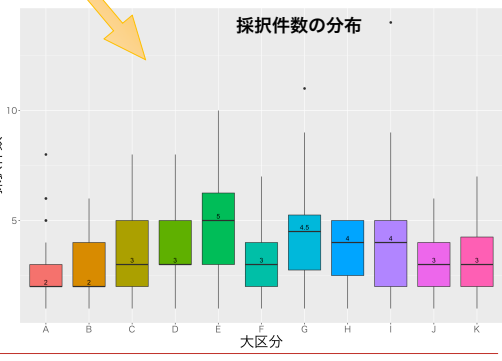
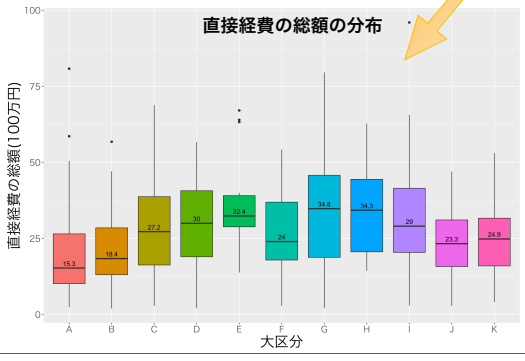
- 注1：研究課題ステータスが「採択後辞退」以外の研究課題をCSVファイルでダウンロードして分析を実施 (本発表では2019年度8月21日時点のデータを使用)
- 注2：過去「10年間」のデータを用いる特段の理由はないが、以下の分析結果より、ベテランの研究者だけでなく、若手の研究者の採択履歴の特徴もカバーできていると思われる
- 注3：分析および、グラフの作成は全て統計言語Rを使用
- 注4：「大型科研費」には基盤A、基盤S、特別推進研究や、総配分額が2000万円以上の研究課題 (e.g., 新学術領域研究の一部等) が含まれる

調査結果 ステップアップの研究者の特徴

分野 (大区分) 別の特徴



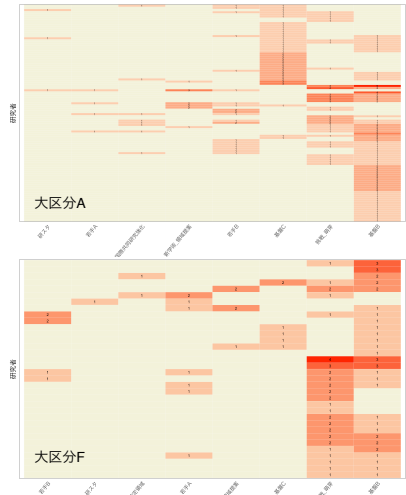
分野 (大区分) によって、過去10年間の科研費採択件数や直接経費の総額の分布は異なっている



研究種目別の採択件数とその組み合わせ

過去10年間に採択された科研費の種目別件数 (全員分)

種目	件数
新学術領域研究 (領域提案)	110
基盤研究 (B)	531
基盤研究 (C)	142
挑戦的研究 (開拓)	4
挑戦的研究 (萌芽)	464
※挑戦的研究を含まず	
特定領域研究	24
国際共同研究強化	23
若手研究 (A)	85
若手研究 (B)	105
研究活動スタート支援	28
計	1516



基盤B獲得者と挑戦的研究 (萌芽) 獲得者との関係

単位 (名)	萌芽有	萌芽無	計
基盤B有	210	132	342
基盤B無	58	71	129
計	268	203	471

- 過去10年間に基盤研究 (B) に採択された経験のある研究者は **76.2%** (342/471)
- さらに、挑戦的研究 (萌芽) にも採択された経験のある研究者は **44.6%** (210/471)
- ※しかし、研究種目別の採択件数やその組み合わせには様々なパターンが存在する点に留意

活用例 エビデンスベースの研究者支援へ

- ステップ1**：本学に所属する全研究者について、上記と同様の分析を実施し、現状把握
- ステップ2**：基盤研究 (A) ステップアップ研究者の特徴と合わせて、部局担当URAへ提供 (各研究種目の採択件数、総配分額 (直接経費) の合計等)
- ※基盤研究 (A) ステップアップ研究者の特徴は、採択されるための必要十分条件では決してなく、あくまでステップアップを果たした研究者の特徴の一側面であることを強調
- ステップ3**：具体的な活用例は部局の状況に合わせ、部局担当URAに一任 (個別研究者への情報提供、科研費説明会での利用等)

●良かった点 (まだ、直接的な効果は見えないが…)

- ・ 着任前のもも含めて、本学の研究者の科研費採択履歴に関する現状の把握 (基盤研究 (A) に挑戦できそうな研究者はどの程度いるのか、等)
- ・ 一般論や誰かの受け売りではなく、データに基づき研究者支援に臨める
- ・ 部局からの要望により基盤研究 (B) に関する同様の調査を実施するなど、新たな調査分析ニーズを喚起

●今後の課題

- ・ 受託研究の状況や論文書誌情報を考慮した、より多角的な観点からの分析が必要
- ・ 時間軸を含めた分析ができないか検討中

